



漢文は面白い

考查まで授業が月曜日のあと1時間しかないが、「囊中之錐」の最後まで行かなければならず、危機的な状況である。が、考查前に余裕をもって授業が終わったからといって結果がよいとは限らず、ギリギリ駆け込んだのに平均点がよかったりするから、まああとは君たちに任せるとしよう（笑）？

しかし、昨日も話したように、漢文は白文が読めることが全てであって、白文が読めれば現代語訳もほぼできているようなものである。だから、考查前の授業では時間の関係で白文を読む練習をする時間が取れなくなってしまったが、試験準備の際は、繰り返し白文にチャレンジして、確実に音読できるようにして考查に臨んでほしい。それが、結果としてセンターの準備にもなる。

＊

しかし、白文で読む練習をしていると、漢文って難しいなあという感じを持つと思うが、それには次のような理由がある。（漢字が苦手とかのレベルの話ではない）

例えば、「～ごとし」と読む字に「若～」や「如～」があるのはすぐに思いつくと思うが、逆にいえば、どうして一つに統一してくれないのかと思わざるを得ないだろう。

これには理由があって、もともと漢文は「音読」するものだったのである。というか、漢文のみならず、近代以前は、どこでも書物は基本的に音読するものだった。（日本でも、京都大学の玉上琢也先生が『物語音読論』という有名な論文を書いていらっしゃる。）

中国語には、音読した時にそれぞれの漢字

の高低アクセントがあって、これを「平仄」というのだが（「平」＝アクセントがたいらということ、「仄」＝アクセントが傾いているということ）、昔の中国人は文章を書くときに、音読する関係から、この平仄を意識して文章を書いた。私にはちっとも分らないが、平字や仄字ばかり続けると、音読した時に耳障りになるらしい。実は、「若～」は仄字で、「如～」は平字なのである。音読の響きをよくするために、意味は同じであっても平仄が異なる字を使い分けていたのである。

しかし、私たちにはその平仄が分からないから、単に「若～」と「如～」の違いにしか見えず、難しく感じてしまうというわけだ。

＊

実は、これは置き字などにもいえるのであって、音読のリズムをよくするために、「字数稼ぎ」や「箸休め」的に助字が使われていたりするのである。もちろん「場所を表す」とか「対象を示す」とか「受身を表す」といった働きの明確なものもあるが、その一方で今一つピンと来ない字が挟まっているという場合も多々あるわけである。

＊

訓点があればまだ何となく分かるが、白文で読むとなると、上述のような語は解釈が難しくなる。もうこれは慣れるしかないのであって、そのためには、やはり教科書の訓点文を白文化して、何度も何度も音読するという練習が結局が一番イイのである。

簡潔な漢文の表現力には学ぶ点も多い。漢文に慣れることで表現力も養おう。